礼拝 2020年6月14日(日)

題 『主の名を呼ぶ者たち』

テキスト：使徒言行録による福音書2：14～24

(聖書箇所は最後です。)

ペンテコステを迎えて、神さまの力である聖霊を受けながら生きて行けることを感謝いたします。聖霊は降る雨のごとく日々注がれていくのだと思います。善き力である聖霊を受けて生きる喜びを感じながら生きて行けたらと願います。それが悩みと苦しむ、悪と矛盾の世を生きる信仰者の支えであり生きる力となるのです。

ところで、昔のこと、何十年と教会生活を続けて来た人が、「わたしは、聖霊が分からない。」と言われていたことを思い出します。聞いた時はこちらが戸惑いでしたが、正直な人だと思いました。でも聖霊を十分に分かるということはないのかもしれませんが。

皆様はいかがですか？

ただ、聖霊を受けたいと願う者は、日常生活の中で心を静めて「主の名」を、イエスさまと神さまの名を、呼び続けることだと思っています。教会の良き働き、キリスト者の良き働きを、進める力が神の力である聖霊の働きです。聖霊の働きは、弱った者たちを慰め元気づけてくれ、真理を教えてください、心に解放と自由を与えてくださるのです。また破れていた人間関係の回復をももたらしてくださることもあるのです。しかし、声高に「自分は聖霊を与えられているのだ。」と熱弁を振るうことは違うように思えます。むしろ、そのような人は、自分が中心になっているようにも思えます。

今日の聖書箇所の小見出しには「ペトロの説教」とあります。イエスと見える形で離れ意気消沈していた弟子たちが、共に集まり祈りっていた時、神の力である聖霊を受けたのです。イエスを裏切った弟子のユダは、自ら命を命を絶ち、すでになくなっており、弟子たちの中にも破れがあったことも事実なのです。しかし、聖霊を受けて彼らは、あるがままで、立ち上がることができたのです。弱さを隠さずに、弱いままで、欠けたままで、なお弱い者を生かし用いてくださる、神に委ねて立ち上がったのです。

聖書では、「起きる」とか「立つ」ということばは、復活を思わせることばでもあります。そうだとすると、ペンテコステの日に、周囲の人々から、13節「しかし、『あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ』と嘲りの言葉の中、ペトロが11人と共に立ち上がった、ということば、弱り、破れていた者たちの、復活を意味しているとも言えるのではないかと思わされるのです。地

上を生きる弟子たちに復活の出来事が起こったのです。私たちにも起こると信じます。

旧約聖書のエゼキエル書37章に記された、谷の中で枯れて、死んでいた多くの骨に神の霊が入り、よみがえった物語を思い出します。ペトロや他の弟子たちも、聖霊を受けた心が魂が、生き返らされ、新たに歩み出す、生き直すことができたということなのです。有名な詩編23編にあるように、神さまは死んだような魂を生き返らすことができる方なのです。かつて私も絶望の中で、牧師として死んだと思ったような状態の中から立ち上がらせていただく経験をしたことがあります。感謝でした。

ペトロは、集まっていた人々に、語りかけました。14節～15節。「14:すると、ペトロは十一人と共に立って、声を張り上げ、話し始めた。「ユダヤの方々、またエルサレムに住むすべての人たち、知っていただきたいことがあります。わたしの言葉に耳を傾けてください。

15:今は朝の九時ですから、この人たちは、あなたがたが考えているように、酒に酔っているのではありません。」と。

ところで、この旧約聖書のヨエルという預言者は、聖書に出て来る人物としてそれ程、知られている名ではないと思います。事実、ヨエルについては、ほとんど何も分かっていないようです。この書物が紀元前9世紀まで溯（さかのぼ）ると示唆する者もいますし、イスラエルがバビロン捕囚からの帰還後（紀元前500年ごろ）に書かれたであろうと示唆する者もあるようです。分かっていることは「ヨエル」ということばの意味は「ヤッハウエは神である。」ということことです。よく知られていない、信仰者たちによって神の働き、言葉は歴史を通して伝えられて来たのです。昔、本で読んだ「歴史において過去に生きた無名の人々を集めると天の星座ができる」という言葉を聞いたことがあります。私は大好きなことばなのですが、歴史において名前のよく知られた人々もいます。そのことは、決して悪い事ではありません。しかし、無名の人々の、言葉を伝える働きや愛の働きが確かに歴史を作っていくのです。愛なる神さまは、そのような無名の人々を用いて、ご自身の働きをなして行かれる方だと思わされるのです。自分には力がないと思う時、わたしたち一人ひとりが、あるがままで神さまに用いられていることを覚えたいのです。

17節「神は言われる。終わりの時に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたたちの息子と娘は預言し、若者は幻を見、老人は夢を見る。

18:わたしの僕やはしためにも、／そのときには、わたしの霊を注ぐ。すると、彼らは預言する。」とあります。

「終わりの時」とは、新約聖書のヨハネの黙示録では、神さまが世界をやが

て大いなる力で完成させる終末の時と受けとめられますが、ヨエル書は、このペンテコステを示す大いなる預言として教会の歴史の中で受けとめられて来たのです。

主イエスは、私たち人間の罪を担い赦すために十字架にいのちを捧げられ、3日目に復活されました。つまり、救い主イエスがこの世に来られたことによって、終わりの時はすでに始まっていると言えるのです。

「あなたたちの息子と娘は預言し、若者は幻を見、老人は夢を見る。若者は幻を見る。「幻」を「理想」と訳している聖書もあります。若者は、将来に生きる。ビジョンを見、理想を求めるのです。時に激しい行動に出ることもあります。また、すでに地上における多くの歩を成してきた、老人たちも夢を見るのです。原語では「夢を夢見る」となっています。過去を思い巡らしながらも、未来を祈ることはあるでしょう。「夢を夢見る」とは、不思議な言い方ですが、日々、天に召される日まで、新たなる思いを持ち、生き生きと生き続けることができるということではないかと思うのです。

ペトロは、まわりの人々に対して

「21:主の名を呼び求める者は皆、救われる。』と語っています。

「主」とは神様の名「ヤーウェ」のこと言われます。「ナザレの人イエスは主である。」「神である。」との告白が最初の信仰告白だと言われます。

「主イエスの名」は既成の宗教を超えていると言われます。主イエスを、宗教、組織や伝統、制度の中に閉じ込めることはできませんし、してはいけないのです。「主の名」、はそれらを遥かに超えた力なのです。

21:主の名を呼び求める者は皆、救われる。』とは、イエスを主と告白する人、イエスの名にすぎり、より頼む者たちは、悪や罪から裁きからも解放され自由になれる。どんな人でもです。告白しない人はどうなるのか、とってしまうのですが、そんなことは詮索せずに、神さまに任せたらよいことなのです。すべての命は神のもとにあるのです。

神さまの善き力である聖霊を受け。ペンテコステの日から、あるがままで立ち上がったペトロと弟子たちは、イエスにおいて神が示された十字架との愛と復活の勝利、救いの働きを自分たちの言葉と行いで示して行きました。

いつもキリストの恵みが彼らと共にあり、彼らを神ご自身が共にいて支えて用いてくださったのです。ここにいるわたしたちも、あるがままで、欠けたままで立ち上がって、主イエスの名を呼びながら、弟子たちの後に続いて行きたいと願うのです。

- 14:すると、ペトロは十一人と共に立って、声を張り上げ、話し始めた。「ユダヤの方々、またエルサレムに住むすべての人たち、知っていただきたいことがあります。わたしの言葉に耳を傾けてください。
- 15:今は朝の九時ですから、この人たちは、あなたがたが考えているように、酒に酔っているわけではありません。
- 16:そうではなく、これこそ預言者ヨエルを通して言われていたことなのです。
- 17:『神は言われる。終わりの時に、／わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたたちの息子と娘は預言し、／若者は幻を見、老人は夢を見る。 18:わたしの僕やはしたためにも、／そのときには、わたしの霊を注ぐ。すると、彼らは預言する。
- 19:上では、天に不思議な業を、／下では、地に徴を示そう。血と火と立ちこめる煙が、それだ。
- 20:主の偉大な輝かしい日が来る前に、／太陽は暗くなり、／月は血のように赤くなる
- 21:主の名を呼び求める者は皆、救われる。』
- 22:イスラエルの人たち、これから話すことを聞いてください。ナザレの人イエスこそ、神から遣わされた方です。神は、イエスを通して あなたがたの間で行われた奇跡と、不思議な業と、しるしとによって、そのことをあなたがたに証明なさいました。あなたがた自身が 既に知っているとおります。
- 23:このイエスを神は、お定めになった計画により、あらかじめご存じのうえで、あなたがたに引き渡されたのですが、あなたがたは律法 を知らない者たちの手を借りて、十字架につけて殺してしまったのです。
- 24:しかし、神はこのイエスを死の苦しみから解放して、復活させられました。イエスが死に支配されたままでおられるなどということは、ありえなかったからです。